

氏名（本籍）	山口 孝行
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7212 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ピエール・ルヴェルディと〈あわい〉の詩学

主	査	筑波大学 教授	博士（文学）	川那部保明
副	査	筑波大学 教授	博士（哲学）	廣瀬浩司
副	査	筑波大学 准教授	Ph.D.（レトリック）	対馬美千子
副	査	筑波大学 元教授		有吉豊太郎

論文の要旨

本論文は、ボードレールやマラルメの詩的改革のあとを受けて新たな詩作活動の可能性を探った 20 世紀前半の詩人たちのひとりピエール・ルヴェルディ（1889-1960）の、第一次大戦最終年の「イマージュ」論（1918）から第二次大戦直後の詩集『死者たちの歌』（1948）にいたる時期にかけて展開した、詩作・評論活動を対象としている。その「イマージュ」論の先駆性により、ルヴェルディはシュルレアリスムを先取りする詩人と位置づけられることが多いが、しかし実際の彼の詩作活動は、人間性の全面的解放をめざしたシュルレアリスムの思想性・社会性を帯びたそれとは異なり、あくまで詩人個人の感覚により得られる「詩的現実」を「生」の「現実」との関わりにおいて問い続け、最終的に〈あわい〉の詩学と論者が呼ぶ詩の地平に至る、という独自の展開を辿るものであった。本論文はその道程の一端を、それぞれの詩的方法論により特徴づけられる三つの時期に分けて追跡することで明らかにし、フランス詩史におけるルヴェルディの位置づけを新たにすることを目的としている。

全体は、序章、第一章～第三章、結論、より成る。

第一章「イマージュ」においては、第一期の詩作行為を特徴付ける方法論「サンタックス」がいかなる詩を生み、その「詩的現実」はいかなる性質をもつかについて、『南北』誌に掲載された「イマージュ」論（1918）の検討と詩集『屋根のスレート』（1918）の詩作品の分析をとおして考察している。

「サンタックス」は、「生」における出来事の中から、詩人個人の感覚により選ばれた「遠くて的確な」諸要素を切り取り、それらを断片的な詩句として紙面上に配置することで、それらの間に固有の関係が結ばれて「イマージュ」が生成してゆくことを促す手法である。たとえば詩篇「正面に」では、「三つの水滴」や「ダイヤモンド」等の諸要素が「サンタックス」的配置において出会い関係を創設し「イマージュ」が生まれ「詩的現実」が開かれるが、この手法の背後には、「詩的現実」をとおして「現実」の本源である「実在」へと近づきたいというルヴェルディの希求がある。「生」における諸要素のなかから「実

在」の性質を帯びると思われるものを取り出し、言葉の地平に置き直すことで「実在」を感受することを期待しているのである。しかしそこに得られる「詩的現実」はつねに「空虚」をはらむ結果に終わる。それは、「実在」とのかかわりの中で詩人が捉え損ねたものが「空虚」としてイメージ化しているのである。「サンタックス」による詩的実践は、「空虚」を内在させる「イメージ」として現れる。この「空虚」を、ルヴェルディは第二期の実践で乗り越えようとする。

第二章「崇高な変貌」では、詩論断片集『毛皮の手袋』（1927）において第二期の方法論「崇高な変貌」を中心とする詩論の検証を行い、同時に詩集『風の泉』（1929）、『ガラスの水たまり』（1929）収録の詩作品において「詩的現実」のあらたな展開を分析・考察している。

第一期の「サンタックス」の方法が「空虚」の現れに行きついたことを受けて、1922-24年頃のルヴェルディの作業は、第一期の詩作品の修正にあてられ、断片的な詩句を文章化することで「未確定性」を排除していくことにあった。その結果描写的になった詩句は、依然「空虚」をはらみながらも、「生」の「現実」から一定の広がりを取り入れ、固有の「詩的現実」を生成してゆく。この過程に介在するのが「崇高な変貌」であり、詩人は、「生」の事象のなかから「実在」の性質を帯びた各々の対象に「崇高な変貌」を施し、より確定したイメージとして捉えようとする。この作業もまた「空虚」を生むが、今回は詩人はそれをそのままのかたちで受け入れ、そうすることで「空虚」を乗り越えて、「堅固さ」を備えた「詩的現実」に至ろうと試みる。

だが詩篇「いつも愛を」では、「崇高な変貌」を何度繰り返しても「堅固さ」を備えるイメージに辿り着かず、最終的に「空虚」のイメージが残存してしまう。しかしここで詩人は、彼個人の「堅固さ」の判断を超えて現れてくる「空虚」を、最終的にすべて受け入れる。「空虚」という「詩的現実」は、世界を駆け抜け「実在」とかかわろうとする詩人の体験が残した明確な「現れ」であり「証言」（詩篇「流れ星」）であると判断し、受け入れてゆくのである。1920年代の詩的実践の到達点である詩篇「美でいっぱい頭」においても、詩人はこの「空虚」を引き継ぎ詩作品に受け入れ、それに対して関係を結び得る詩要素を対置し、その関係から新たなイメージを生み出そうとしたのである。

第三章「〈あわい〉の詩学」においては、「闖入」を方法的特徴とする第三期の〈あわい〉の詩学に関して、手記『私の航海日誌』（1948）や手記『乱雑に』の断章を検証し、詩集『死者たちの歌』（1948）の詩作品の分析を行っている。〈あわい〉の詩学とは、ことなる要素同士（「間」）の出会い（「機会」）に詩的契機を見出し、諸要素の「的確」な関係によって〈淡い〉詩的イメージを提示する詩学である。

詩篇「長い射程」においては、戦後の生活の中で詩人が詩と触れ合った喜びが内的生の充実として現れてくるが、その直後にその充実と全く同調しない悲劇を示す要素群が「闖入」してくる。「闖入」してきた要素群は排除されることなく、二つの異なる要素群が反発しながらも一所に置かれ、そこから混じり合いの運動が展開する。しかし、喜びのイメージと悲劇のイメージは相互に浸透し合うことなく、互いに闖入を繰り返し、最終的に悲劇のイメージが支配的になったところで詩は閉じられるのである。

この悲劇のイメージは、第二期までの「空虚」と同じ位相にあり、書く喜びを覆い無化へと向かわせる脅威であるが、同時に、その乗り越えをめぐりて書く行為を支え続けるものである。この詩において「闖入」は、反発しながらも密接な関係で結ばれる内的生の充実の場と「空虚」との並存を、成立させているのである。

一方、詩篇「彼は頭を金でいっぱいにして…」は詩篇「長い射程」とは逆に、絶望のイメージから詩が始まる。それは、「長い射程」から受け継いだ「空虚」であり、それに対置されて希望のイメージ

が現れてくる。詩的現実として受け入れた絶望に希望が対置され、混じり合わされ、同化される。絶望も希望も含みながらそのどちらでもないただひとつの詩的イメージが生成してゆき、その結果〈淡い〉のイメージが出現する。〈淡い〉のイメージは、絶望のイメージであるとも希望のイメージであるとも決定できない、両者の間（あわい）に浮かび上がる「詩的現実」なのである。

かくしてルヴェルディは、詩人自身が身を置く世界の事象から、自らの判断に応じて詩の素材となる要素を選択し、取り出し、詩の言葉として受け入れ、精製していった。この詩行為は第一期から第三期を通じてつねに詩人を、個人の判断を超えて現れてくる「空虚」との出会いに導いていった。そしてこの出会いをもさらに詩人は対象化し自らの詩的現実として迎え入れていった。この「空虚」のたび重なる捉え入れによりルヴェルディは他なるものを自分の詩学に組み込み、組み込むごとに詩的可能性を開き深めてゆき、最終的に〈あわい〉の詩学に至ったのである。

「実在」とかかわろうとする詩人の実践は、「実在」の性質を帯びたルヴェルディ固有のイメージを「詩的現実」となし、またそれを「生」に帰してゆくことで「生」を活性化し、「生」の場を、「実在」をより近しく感じ得る場としたのである。

ルヴェルディは「生」に対して詩というささやかな付加物を置いた。それは、一人の人間として自分の「生」をより良く生きたいという願いを詩に託したからである。慎ましい、しかし「生」のありように根底から関わる詩の実践を生涯貫くことで、詩人はフランス詩史に確固たる足跡を残したと言える。

「生」に寄り添うルヴェルディの詩的営みは、「生」を欠如あるものとして「絶対的自由」へと書き換えてゆこうとするブルトンの詩的実践の背後で、脈々と続けられていた。そしてそれは、「生」を受け入れその中に「実在」とかかわり得る契機を見出し、新たな「詩的現実」の場を生み出してゆこうとする詩誌 *L'ÉPHÉMÈRE* の動きなど、第二次大戦後の現代詩の試みにこそ繋がっているのである。

審査の要旨

1 批評

本論文は、20世紀前半のフランスの、ともすればシュルレアリスムの先駆者として位置付けられる詩人ピエール・ルヴェルディの詩的活動をとりあげ、ルヴェルディ独自の詩活動の画期となる「イメージ」論から第二次大戦直後の詩集『死者たちの歌』までの変遷を追跡し、最後に彼が（主語がないので）、〈あわい〉の詩学と論者が名付ける、「生」の「現実」と「詩的現実」の双方に開かれた詩学へと至ったことを明らかにしている。1910年代後半、1920年代、1930年代以降の三期に詩的活動を分け、それぞれに「サンタックス」、「崇高な変貌」、「闖入」の方法を対応させるという論者の視点は、ルヴェルディの詩論が自らの詩論に関してアフォリスム的に語るが多かっただけに、その詩的実践を支えていた詩的意図の方向を見定めるのに有効であり、これによって論者は、「本質的な欠如」(M. Collot)を内在させたままの〈あわい〉の詩を、ルヴェルディの詩的活動の到達点として確認できた。この確認は、ルヴェルディの詩的活動の固有性を強調するに留まらず、広く文学史の観点からもルヴェルディの詩の積極的な位置付けを促すものである。19世紀後半のボードレー、ランボーやマラルメによる詩語の改革が「生」の「現実」と「詩的現実」の切断をもたらしたのに対して、ルヴェルディの詩作は逆に、「詩的現実」と「生」の「現実」を結び、人が世界にあることの手応えを得るための行為として捉えなおすことができ、そして同時に、第二次大戦後の *L'ÉPHÉMÈRE* 誌に代表される詩語と「現実」さらには「実在」との関係づけの場を開く試みの先駆と見なしうるからであるが、こうした比較研究（くらい）

については今後さらなる検証が期待される。

その一方で、本論文には問題点も指摘された。まず、主要なタームの意味するところが確定されないまま論が進む傾向があること（「現実」「実在」「生」「的確さ」「空虚」「精神」「あわい」等々）、Collot や Chol に代表される先行研究に対する本論の主張の差異化が十分になされていないこと、「イマージュ」が「生」へと帰還してゆくことの意味が十分に説明されていないこと、「実在」「現実」「空虚」の関係という文学の根本問題への言及が不十分であること、等である。いずれも本論文の執筆姿勢と内容に関わる重要な指摘であるが、しかし通時的、方法論的にルヴェルディの詩的活動に迫り、文学史上の新たな位置付けにもつながる解釈を提示した本論文の価値を貶めるものではない。

2 最終試験

平成27年1月14日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。